

重要性をます東海の航空自衛隊基地 各務原―小牧行動へ

不戦ネットは一月から二月にかけて各務原基地（正式には岐阜基地ですが便宜上各務原基地と呼びます）、小牧基地行動に取り組みます。当初の課題は小牧基地への給油機配備の問題でしたが、いろいろみていくと、東海地方の基地群（浜松・小牧・各務原）は航空自衛隊の海外派兵や質的な転換に大きな役割をはたしていることが見えてきました。そこで二月の給油機配備への反対行動にあわせて各務原にも取り組むことにしました。（浜松は現地で行動があれば参加したいと思います）

延び延びになっている給油機の配備問題について今までとは違った角度（産軍複合体の利権問題）から見たものと各務原の実情について簡単ですがまとめてみました。

●アメリカの給油機スキャンダルと日本

今年春、ボーイングのホームページは、アメリカ軍が次期給油機にKC・767を採用した場合ボーイング関係工場の所在地の州経済がどれだけ潤うか、という大キャンペーンを行いました。今ボーイングは次期給油機採用に必死になっています。

元々、ボーイングに決定していたのですが、空軍高官がボーイングにライバルの価格情報を流し、退官後に天下りしたスキャンダルなどのため、白紙撤回されました。次期給油機選定の提案は四月十二日に締め切られましたが、まだ決定が降りていません。春にボーイングは大キャンペーンをおこなったのです。

KC・767に対抗しているのがエアバスA330改造型です。こちらはすでにイギリス、オーストラリア、アラブ首長国連邦アブダビで採用されました。性能的にも、A330のほうが給油能力・人員・貨物積載量とも優れています。A330はノースロップ・グラマンが提案しています。六〇〇機

近い次期給油機の採用問題は、議会も含めてアメリカ産軍複合体の暗闘のなかにあります。

KC・767のベースになるボーイング767の製造は日本が二九%、イタリアが二七%分担しているし、日本でのボーイングの民間機割合はほとんど高くなっています。日本の大手航空機メーカー三社（三菱重工、川崎重工、富士重工）は、ボーイングと運命共同体化しているのです。（この三社は自衛隊機のメーカーでもあります）従って、KC・767採用ははじめから決まっていたのです。

今、話題のGE社のエンジンはKC・767にも使われます。アメリカ空軍へのボーイングの提案はプラット・アンド・ホイットニー製エンジンです。浜松のAWACS（E・767）もCX（次期輸送機）も同じGE製です。空自の大型機はGE製エンジンでほぼ統一されます。規模は違いますが日本でも政官財が絡んだきな臭いものを感じざるを得ないでしょう。因みに、イタリアにはエアバス社から切り替えの提案もなされているという情報もあります。アメリカの動向しだいですが日本だけがKC・767を導入するということになりかねません。そうなればメンテナンスなどの維持経費が割高になります。将来的には給油機を八機から一二機にまで増強したいという話もあるようで、運用上同一機ということでべらぼうに高い買い物になる可能性もあります。それはそれで利権に絡んでいる人間や会社はいいのかもしれないませんが。

延び延びになっていた配備は二月中に行われると防衛省は言っているし、ボーイングは二号機も同時に納入して遅れを取り戻すという情報もあるようです。たびかさなる納入延期がこのような問題とどう関連するのは今のところわかりませんが、空中給油輸送機の導入にも大きな疑惑が付きまといているのは間違いないのではないのでしょうか。産軍複合体は戦争の仕掛け人たち、戦争を続けることで巨大な富を生み出そうとする死の商人そのものです。小牧がその拠点になることは認められません。

●防衛産業と一体になった基地―各務原

各務原について、今回は三点の問題を取り上げます。

一点目は、航空機関連の開発拠点―実戦に即した試験場であるということです。防衛省の技術研究本部飛行開発実験団が所属しています。ここでは航空機とその関連機器と航空機搭載のミサイルの性能試験を行っています。日本独自開発のものだけでなく、新規導入の航空機などの性能試験も行います。給油機も実験団から派遣された部隊が小牧で性能試験を行ってから実践配備ということになります。隣接の川崎重工をはじめ三菱などの主要航空機、ミサイル関連の企業が立地する愛知、岐阜エリアにある基地の役割は非常に大きなものがあります。

二点目は、各務原は川崎重工と一体となった基地ということ。川崎重工は次期哨戒機（PX）、次期輸送機（CX）の開発、製造の中心会社です。（三菱、富士も分担します）（CXはGE製エンジンをめぐっての汚職の舞台になっていきます）。C-130やAWACSの整備も行っています。空中給油機も川崎重工が整備しますので、まず各務原で受入検査と再整備がおこなわれます。航空自衛隊で言えば大型機は川崎重工、戦闘機は三菱重工が中心に生産、整備という区分がなされているようです。三菱と名古屋空港以上に基地と川崎重工は一体的な存在です。

三点目は、各務原には中部地域をエリアにする対空部隊―第四高射群本部と高射隊が駐屯しています。日本の対空部隊は対航空機から対ミサイルに対象と装備を変えてきています。ミサイル防衛システムの一貫としてPAC3が配備されはじめ、〇八年には浜松、〇九年度には各務原に配備の予定になっています。前倒しになる可能性もあります。日本でも有数の航空宇宙分野を中心とした防衛産業を守るためのものです。

先日、イージス艦「こんごう」がハワイ沖でミサイル迎撃実験に成功したと報道されました。この実験のために日本は六十億円をアメリカに支払っています。このシステムを導入するためには配備することに有償のアメリカでの実験が義務づけられています。この試験場では実験に来る外国軍をお客さ

んとよんでいるようですが、その中でも日本は最良のお客さんでしょう。

アメリカ軍と一体化する、同盟関係を強化するというのはアメリカの産軍複合体の構造に日本も組み込まれることを意味します。既に、がんにがらめになっているようです。そうした利権構造の表面的な一部が露呈したのが守屋―山田洋行の汚職事件だったのです。

東海地方の浜松、各務原、小牧の基地群は航空自衛隊の海外派兵の拠点、米軍再編のなかで日米両軍の一体化の重要な役割を担っています。それはアメリカの巨大軍需産業と繋がった日本の防衛産業とも密接不可分の関係にあります。

一・二七行動の準備のために各務原に行きました。最初は土曜日でした。大きな公園が整備され、イチョウの街路樹が続く街並みに、住みよさそうな街に見えましたが、広大な敷地で街を分断する基地や川崎重工の工場群には違和感もありました。次に平日にいきました。各務原に近付いたらPXらしい飛行機が飛んで行き、街のなかでは頭の上をジェット戦闘機が編隊で飛び回っていました。非常に大きな爆音はビルの中においても容赦なく降ってきました。これが本当の各務原という街の姿だったのです。

各務原では、頭上を実戦に備えるための試験をしている戦闘機や新開発、新配備の航空機が飛びまわっています。基地内にはミサイルが臨戦態勢で空を睨んでいます。木曾川をはさんで南側の小牧ではイラクに派遣されるC-130が日常的に飛び回っています。県営名古屋空港にF2戦闘機が墜落し、韓国から戻ってきた米軍機が「緊急着陸」しました。浜松から飛び立ったAWACSは朝鮮半島を監視しています。こうして並べると決して平和な日常ではなく戦争が日常になっているのではないのでしょうか。これ以上私たちの街が、地域が戦争と結びつかないように一月、二月に一步を踏み出したいと思えます。（早見）